No.112(1995.7)

静岡大学附属図書館報　図書館通信

電子図書館

合庭　惇

パーソナルコンピュータの普及とともにマルチメディアやインターネットが身近になって、ここ十数年の間にさまざまに議論されてきた高度情報化社会がようやく具体的な形を取り始めたようだ。通信事業者、ハードメーカー、マスメディアなどがそれぞれの思惑で推進してきた情報の高度化であったが、コンピュータの多機能化と広帯域のディジタル通信網の普及は、社会の姿を新しく描こうとしている。

「ネットワークにつながっていないコンピュータは、ジャングルに置き忘れられた自動車だ」という有名な言葉があるが、まさにコンピュータは通信回線を介して他のコンピュータと接続されてはじめてその能力を発揮することができる。今ではお馴染みになったパソコン通信は、古いメディアである電話やファックスに替わって大容量のデータ通信を可能としただけではなく、コミュニケーションの新しい形態を産み出している。

また、ワープロの使用と印刷のコンピュータ組版は大量の電子データを日に日に生成しつつある。その一部は、ＦＤやＣＤ－ＲＯＭを使った電子出版として普及しているが、さらには、通信回線を経由して配布されるネットワーク出版の試みも行われるようになった。

電子化の波は、出版のみならず新聞、放送などのマスメディアの世界を洗い、そして個人の知的生産の現場をも巻きこんでいることは、改めて言うまでもないことであろう。そして、電子化された情報が通信によって自由に飛びかう今日、知的資源をどのように蓄積し伝達するかが課題となってきた。電子図書館という考え方も、電子化によるメディア環境の変化のなかから登場してきたものである。

いわゆる一次的な情報、図書館ならば書誌情報（著者名・書名・発行年月日・発行所・分類番号・キーワードなど）はデータベースとして蓄積されている。だが、電子図書館の狙いは、書物を丸ごと電子化して蓄積することである。既に市場には電子出版物が存在していて、国立国会図書館にも昨年の春にＣＤ－ＲＯＭ閲覧室がオープンしている。電子図書館では、このようなＦＤやＣＤ－ＲＯＭとして出版されているものを収集するだけではなく、電子化されている出版データをサーバーに収納してオンラインで閲覧しようとしている。電子図書館は、本のない図書館、建物のない図書館、壁のない図書館などと言われている。

米国では、全米の図書館が所蔵する資源の大部分を電子形態で提供する仮想の図書館であるナショナル・ディジタル・ライブラリの計画がすすんでいる。この計画は議会図書館（ＬＣ）において推進されているが、ＬＣ自身の既存蔵書の電子化と電子コレクションの取得を今世紀末まで

に達成しようとするものである。

データベース、電子出版、電子新聞そしてインターネットの先進国である米国は、大学と出版社とが協力しあって電子図書館のプロジェクトをさまざま進行させている。ニューヨークのシュプリンガー社とカリフォルニア大学とが組んだRedSage 、エルゼヴィア社とカリフォルニアも含めて９つの大学がすすめるTULIP が代表的なプロジェクトであろう。シュプリンガーもエルゼヴィアも医学、薬学、化学などの分野で電子ジャーナルを早くから手がけている出版社であるだけに、この共同開発の成果が期待されている。

一方、ヨーロッパでも電子図書館（米国ではディジタル・ライブラリと呼ぶが、ヨーロッパではエレクトロニック・ライブラリと呼んでいる）の開発は盛んだ。昨年末に駆け足で英国、オランダ、フランスのプロジェクトを見学してきたが、日本では情報通信基盤の整備というと関心は必ず米国の動向に向かう影で、さまざまな新しい実験が試みられているのを知ることができた。

まず大英図書館（ＢＬ）であるが、ここの電子図書館研究開発部門はヨーロッパでの推進役である。国内の大学図書館の電子化を推進するだけではなく、オランダやフランスと組んだ国際的なプロジェクトを積極的に支援している。ヨーロッパ連合の資金だけではなく英国政府の予算を豊富に使って研究開発と啓蒙活動を展開しているのであるが、まさに未知の領域における新しいメディアの創造に意欲的に取り組んでいる。

オランダではエルゼヴィア社の本社がヨーロッパの大学を集めてTULIP のプロジェクトに力を入れているし、フランスでは新築の国立図書館（現在、一部が週末に公開されている）が中心となって、文字テキストだけではなく画像も含めた電子化の作業をＢＬの協力のもとで進めている。

日本では、二〇〇二年に国会図書館の関西分館が電子図書館としてオープンすると言われているが、そのためのシステム実験が慶応大学の藤沢キャンパスで始められようとしている。国会図書館が所蔵する明治期文献のマイクロフィルムを画像データとして電子化するなど、ソフトとしての蔵書の電子化がいろいろと試みられているようだ。

ところで、この図書館の電子化にはさまざまな課題が待ち受けている。

電子データは複製と改変が容易であるが、著作権の存在しているデータをいかに保護していくのか。保護をハード側で行うのか、それともソフト側あるいはブラウザーやビューワーで行うのか。

電子データをどのように収集するのか。出版社からの提供を受けることが可能なのか。受けた時には、商業出版社の既存の権益とどのように調和していくのか。

コンピュータを介していない活版印刷時代のテキストをいかに電子化していくのか。イメージ（画像）として電子化しても日本語のＯＣＲの能力では、テキスト・データに加工することは困難である、などなど。

課題はちょっと思いついただけでもさまざまだが、学術雑誌や学術出版のあたりから電子図書館プロジェクトを始めていったらどうかと私は考えている。場合によったら、これからの大学出版局は図書館と協力しあって電子出版局という形態で構想していくべきではないだろうか。

書籍や雑誌を蔵書としてもつ図書館は今後も存続していくことは確実であるが、電子メディアに対応した機能をもたせるためには、そして情報爆発と言われるように日々出版物がどんどん増加していく現状に対応するためには、電子というメディアの力を借りながら柔軟な発想で展開していかなければならない。

（教養部・社会学）

静岡大学附属図書館の課題

情報管理課長　森　松　睦　雄

先日（平成７年５月３１日）、本年度からのはじめてのこととして、文部省学術情報課で全国の「大学図書館に関するヒアリング」が行われた。静岡大学としては、平成６年２月に「静岡大学附属図書館の今後の課題」と題して自己点検・評価の報告書が刊行されており、その中に上げられている５つの課題に関連したことを報告してきたところである。

「ヒアリング」には、５項目から成る「大学図書館の課題と対応」をあらかじめ報告することになっていて、以下がその骨子である。

１．管理運営
　（１）図書館運営費の大部分を各部局からの供出に依存していることによる財政基盤の脆弱
　（２）定削による職員１人当たりの業務負担率の増
　（３）本館と浜松分館(80Kmの距離)との連携協力
　（４）人事の固定化の解消
２．学内ＬＡＮの活用
　（１）情報処理センターとの密接な協力関係の必要（人材の確保・育成）
　（２）学内ＬＡＮを通してのインターネットへの参加（平成６年度実現）
３．資料の収集・保存
　（１）学生用図書の充実
　（２）書庫の増設
４．利用者サービス
　（１）目録データの遡及入力（昭和６２年度以前の受入図書）
　（２）開架図書冊数の増加
　（３）土曜日開館時間の延長（現行　9:00～12:00）
　（４）日曜・休日開館の実現
５．その他
　（１）情報化に対応した新しい技術・知識を身につけた人材の確保及び配置の必要
　（２）キャンパス・ミュージアム構想における図書館の役割とその連携・協力

本学からは鈴木事務部長と森松情報管理課長が出席した。文部省側から木島課長、金田補佐、石橋大学図書館係長が対応した。割当て時間は２０分と短かかったので、あまり詳しくは説明できなかったが、特に強調したいこととして(１)「図書館運営費」、(２)「人事の固定化の解消」(3)「書庫の増設」、(４)「人材の確保」を上げた。以下簡単に説明する。

（１）図書館運営費

静岡大学の図書館運営費は大きく分けて２つの柱から成っている。１つは文部省からの直接配当、他は学内からの配当である。その割合は、文部省から２６％、学内から７４％となっており、全国国立同規模（Ｂクラス）１４大学とほぼ同率である。ただ、学内からの配当がほとんど直接学部拠出のみということは、図書館の存在性格からして好ましいことではなく、財政的に不安定になってくるのは否めない。確かに受益者は各学部の教官・学生ではあるにしても、図書館は単に各学部の個別の立場の合成によってのみ構成・運営されるのではなく、全学的な観点からも運営されるべきものであるとするならば、運営の財政基盤においてもこのことについて、しかるべきところでご検討願えれば有り難いと思っているところである。

尚、文部省から、運営費についてではなかったが「学生用図書費」のことで、大学総経費の一定率による拠出の方法はとらないのかとの質問があった。

（２）人事の固定化の解消

浜松分館をはじめ近隣の国立機関は80Km以上の遠隔地にあるため、異動が困難である。極端な言い方をすれば、採用されてから退官するまで静大図書館を離れたことがないということもあり得ることとなる。しかしこれからは定削などもあって、少数精鋭主義の要請がますます高まるであろうことを考えるならば、図書館の活性化のためにもまた人材の確保のためにも、本人の希望を考慮しながら広域異動などを積極的に取り入れていかねばならないであろう。

（３）人材の確保

学内ＬＡＮやネットワークなどの技術・知識を身につけた人材については、今や全国共通して求められているところであるが、なかなか容易ではない。学術情報センターを中心にした研修の機会を多くしてもらうなどして、現在いる職員を育成することが必要になってくる。

尚、この問題に関しては、昨年度国立大学図書館協議会に「大学図書館職員の育成確保に関する調査研究班」（主査館：名古屋大学、副主査館：静岡大学）が設置され、その検討経過が平成７年度の全国総会で報告される予定である。

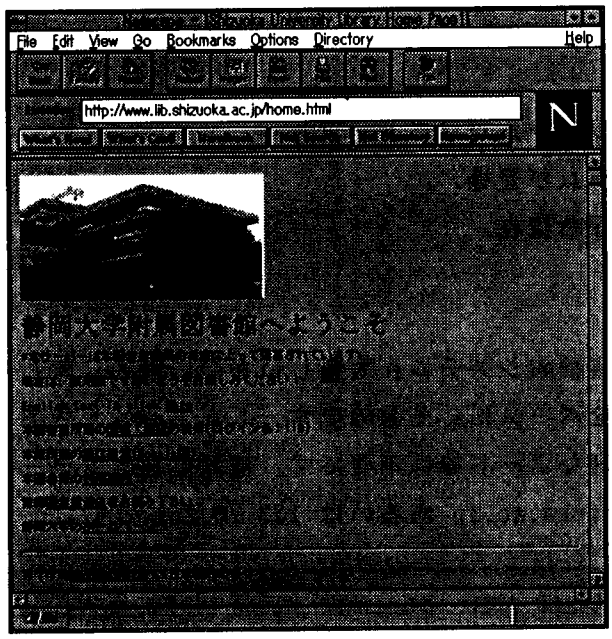
（４）書庫の増設

平成４年度から概算要求をしているところであるが、状況は厳しいようである。

今回はじめてのことでもありまた時間も短かったので、十分な説明はできなかった。しかし、今後この「ヒアリング」がどのような形態で継続するのかあるいは今回限りなのか明確でないが、これに止まらず、必要に応じてさらに文部省へのはたらきかけを行っていく所存である。また、学内においても上記のことについて特段のご理解をお願いする次第である。

本通信は、Ｍｏｓａｉｃ上でも公開されています。Ｍｏｓａｉｃ上のものにはハイパーリンクが張られています。是非、ご覧ください。

WWWのホームページ公開！



最近、マスコミを賑わしているインターネットだが、その中でもWWWが話題の中心を占めているようだ。そのWWWに我が図書館もホームページを公開した。

日本語版（左図）と英語版（下図）の両方があるが、アクセスは、まず英語の方で、

http://www.lib.shizuoka.ac.jp

として頂くと、富士山の写真ともにでてくる。

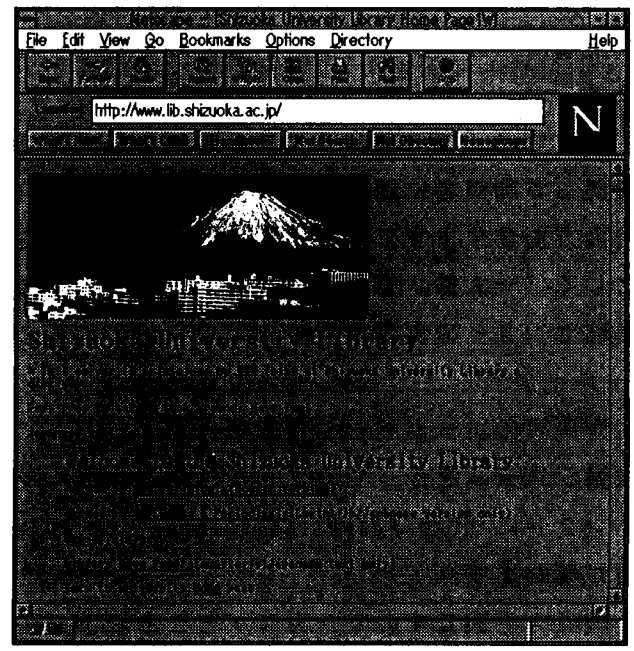
画面にも書いてあるように、現在は、図書館の職員有志による試用版の段階だが、内容は本格運用といって差し支えないものと考えている。

冒頭に、ふたつの検索システムが登場。別記事で詳しく紹介されている、本学の情報処理センターのマシンで運用されている図書・雑誌検索システムと、このホームページを展開しているサーバーに搭載されている雑誌検索システムである。

次いでは、本図書館の利用案内。特に日本語版の方は本体１００行ほどだが、WWWの特徴たる幾つものハイパーリンクがなされており、現在も日々増殖中である。

本「図書館通信」も、１１０号から搭載。本号も皆様の手にわたるころには、こちらで読むことが可能となっているはず。

以下、図書館の利用者に有用と思われる各種のホームページへのリンク、たとえばＮＴＴのホームページ、東京工大図書館、地図から世界各地のサイトにアクセスができるＶｉｒｔｕａｌ Ｔｏｕｒｉｓｔ、雑誌記事の検索とともに全米の多くの図書館にダイレクトにつなぐことができるＣＡＲＬ等へのリンクが施されているほか、エスパルスの情報等、図書館職員提供のデータがある。



このホームページの公開とともに、利用者用にＭｏｓａｉｃ専用の端末を２台設置。すでにお得意さんとなっている学生も何人かいるようである。

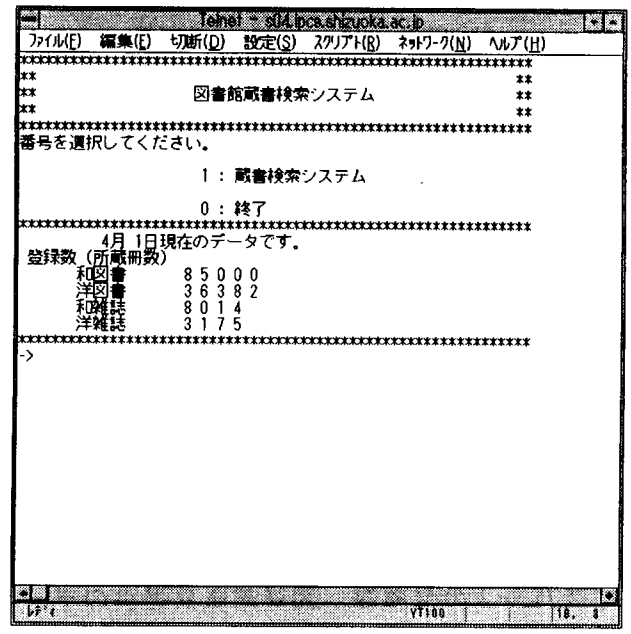
なお、本ホームページの一部は、アメリカのインターネット用のイエローページともいうべきＹａｈｏｏとＥＩｎｅｔにインデックスされていて、毎日２０ケ国以上から、３００強のアクセスがある。

どれを使う？3つのOPAC

Online Public Access Catalogue

※情報処理センターマシンによる検索システムがリニューアル.
※Ｍｏｓａｉｃ版による雑誌検索システムが登場.
※・・・・もちろん、ＬＯＯＫＳ／Ｕ版も健在.

情報処理センターの機種更新に伴い、「学内蔵書検索システム」も新しいものに替わりました。日立製作所製の全文検索システムBibliotheca/TSをベースにしたものです。ｔｅｌｎｅｔでアクセスしますので、これまでのシステムのように特別なボード等は不要です。情報処理センター分室のｓ０４で運用していますので、s04.ipcs.shizuoka.ac.jp あるいは 133.70.251.204 にアクセスしてください。ログイン名はｌｉｂです。



ログイン名を投入しますと、右図の画面になります。以下、ガイドに従い検索するデータベースを選択してください。検索の方法は画面にガイドが出ます。また、検索の途中、いつでもｈをキーインするとこのガイドが表示されます。

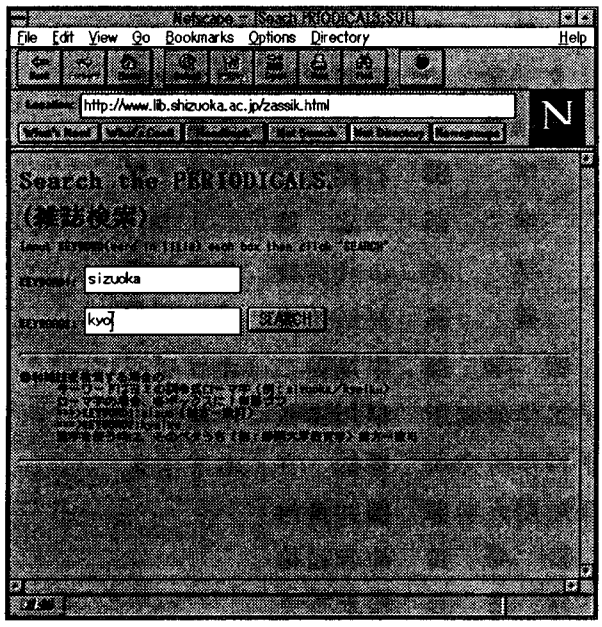
学内の各研究室の端末だけではなく、インターネットに接続されていれば、国内のみならず世界中のどこからでもアクセス可能。年中無休の２４時間使用できますが、毎土曜日早朝のデータベース更新時のみ（約１時間）、接続ができなくなります。

本館では、この検索システム専用の端末を３台設置して利用者に開放しています。学生諸君の利用の方もまずまずですが、少なからぬ諸君が日本語の投入に悪戦苦闘している感じ。変換ソフトとして「一太郎」でおなじみのＡＴＯＫを使用していて、慣れないと、確かに難しい。幸い情報処理センターの実習授業でＡＴＯＫにふれるようなので、学生諸君は良く勉強しておくように！！

ＷＷＷのホームページ作成の一環として、Ｍｏｓａｉｃ上でアクセスができるように、と雑誌検索システムを作ってみました。ホームページの該当の場所をクリックして頂くか、あるいはダイレクトに http://www.lib.shizuoka.ac.jp/zassik.html と入力してください。次ページの画面が現れます。

職員の手製ですので、カユイところに手が届かない？！仕様（実体はａｗｋを使った全文検索）

ですが、是非、使ってみてください。唯一のセールスポイントといえば、前記の日本語入力の苦闘ぶりを受けて、和雑誌のヨミをローマ字としたこと。画面にもありますように各ボックスに単語を入力してください。２語入力したときは、ＡＮＤ検索となります。



ここで注意して頂きたいのが、訓令式であること。カード時代の大学図書館職員のくせが出てしまったようです。利用者は無意識のうちにヘボン式の綴りを使うようで、静岡大学附属図書館であるにもかかわらず静岡大学発行の紀要を所蔵していない、という結果を得る人が多いようです。近いうちにヘボン式に変更したいと考えています。

漢字で検索する時は、単語で切らずにベタうちをしてください。

図書館内からのみのアクセスですが、ＬＯＯＫＳ／Ｕ版の検索もこれまでどおり運用されています。パソコンやＷＳを利用している前記のものと異なり、検索だけの単機能の端末をつかっていますが、キーボードやマウスに慣れていない人にとっては、かえって使いやすいようです。突然、関係のないウインドが開いたり、場合によってはシステムそのものが落ちてしまうというようなことがありませんから。ただし、キーボード等の扱いに慣れれば、前のふたつの方がずっと便利なはずです。

ＬＯＯＫＳ／Ｕ版については困難が伴いますが、前のふたつについては改変が容易ですので、お使いいただいて、お気付きの点がありましたら、どしどし要望をお寄せください。可能な限り対応したいと考えています。また、接続の方法等で不明な点がありましたら、こちらもお気軽に問い合わせてください。最後になりましたが、ふたつの新しいＯＰＡＣについては、情報処理センター分室の高田さんに大いに助けていただいたことを感謝します。

◎　この３月、本図書館から次のふたつの冊子体目録が発行されました。

「河内清文庫目録」

元人文学部教授で附属図書館長もつとめられた、故河内清氏の蔵書のうち、本学に寄贈されたフランス自然主義文学およびエミール・ゾラに関する洋書４３８冊、和書４６冊が収録されている。

「白石信明文庫目録」

浜松市で６４年間にわたり弁護士として活躍されていた、故白石信明氏蔵書より本学が寄贈を受けた７１０冊が収録されている。

■ 人事異動

（配置：平成7年1月20日）

小板橋道代（総務係総務主任→教育学部附属養護学校・幼稚園事務係長）

伏見　宏子（教育学部附属静岡小学校事務係総務主任→総務係総務主任）

（平成7年4月1日付）

谷口　　渉（情報管理課長→琉球大学医学部管理課長）

森松　睦雄（香川医科大学図書課長→情報管理課長）

四ノ宮立男（総務係長→経理課用度係長）

石田　光男（経理課出納係長→総務係長）

伏見　宏子（総務係総務主任→総務係会計主任）

山田　典代（農学部会計係庶務主任→総務係総務主任）

中村　　茂（農学部会計係予算主任→管理運用係管理運用主任）

石上　修二（管理運用係管理運用主任→工学部経理課経理主任）

佐藤　和慧（運用係→参考調査係）

藤田みよ子（参考調査係→洋書係）

藤田　　洋（洋書係→運用係）

黒柳　康子（総務係→理学部庶務係）

■ 平成７年度図書館委員会委員

館長	小澤康彦	
分館長	清水　孝	
人文学部	染谷臣道	三富紀敬
教育学部	上田　功	久島　茂
理学部	石館健夫	桜井　厚
工学部	末永　修	
農学部	小島睦雄	竹内久直
教養部	尾形照彦	横山義昭
情報学部	中尾健二（オブザーバー）	
電子工学研究所	早川泰弘	中西洋一郎
電子科学研究所	野飼　亨	木下治久
法経短期大学部	櫻井良治	
事務局長	沖吉和祐	
事務部長	鈴木英夫	

■ 平成７年度「図書館通信」編集委員

館長	小澤康彦
人文学部	三富紀敬
教育学部	久島　茂
図書館	米津友子
	渡邊通江
	山川玲子
	望月信夫

図書館では学内関係者が執筆等をした図書館資料を集めています。出版等されましたら是非、図書館に１部ご寄贈くださるようお願いします。

◎附属図書館では、夏季休業に伴い、下記のとおり実施しますのでお知らせします。

１．貸出図書の返却期限日の変更。

平成７年７月３１日（月）から９月２５日（月）までに貸出した図書の返却期限日を１０月３日（火）とします。

２．閉館時刻の変更

平成７年８月１日（火）から９月１４日（木）までの間、閉館時間は次のとおりです。

平日　　午後５時

（土曜日は休館です）

静岡大学附属図書館報「図書館通信」　第２６巻１号（通巻１１２号）　１９９５年７月１２日
発行所　静岡大学附属図書館　〒422 静岡市大谷836 ☎054(237)1111 FAX054(237)9580
印刷所　（株）黒船印刷　e-mail bsnmoti@ipcs.shizuoka.ac.jp